

生徒間の繋がりを高める中学校社会科の授業実践について

—生徒の肯定的反応を引き出すための実践—

学籍番号 229316

氏名 片山拓海

主指導教員 松永尚子

副指導教員 岩田文昭

1. 背景

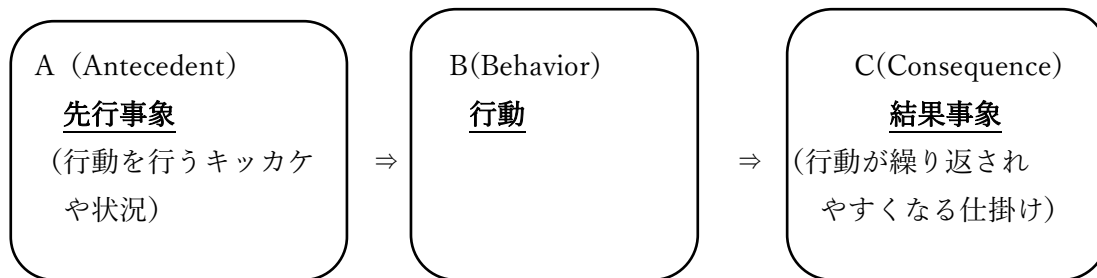
実習校である A 中学校では学力の格差が問題となっている。他の学校では、学力の格差はあるものの完全な上下関係ではなく、中間層が存在しているだろう。この中間層に合わせることで教育活動が行いやすくなる。しかし、先生方のお話によると A 中学校では中間層が少なく、教育活動の照準をどこに合わせるのか、学力の格差をどう埋めるのかが課題となっている。また、授業態度に関してもすぐに机に突っ伏してしまう子、おしゃべりをしてしまう子が多いことが分かっている。一方、生徒たちに話を聴いたところ、「勉強をがんばりたい」や「将来は宇宙飛行士になりたいから数学や理科を得意にしたい」といった勉強や将来に対して肯定的な反応を示す生徒が多かった。これは授業態度と子どもたちの想いは比例していないことを指している。

2. 目的

背景でも述べたように、子どもたちの肯定的な想いを尊重し、潰してしまわないような実践を行いたい。その結果、子どもたちに「聴く力」を身につけさせることが重要ではないかと考えた。これが身につくと、授業の受け方や生徒同士の会話も改善する。背景には記述していないが、生徒同士の会話や様子をみていると、他者の意見を聞かず自分の話ばかりする子や話し合いの場での聴き方が作業をしながら聞くといった子が目立った。その観点からも「聴く力」を身につけさせる必要があると感じた。そして、本実習においては「聴く力」の土台作りを行った。聴く力を育成するには生徒同士の話し合いが肝になってくるが、授業内容に関する話し合いを行うのは子どもたちの様子を見て難しいと感じたため、まずは話し合い活動の土台となる「相手に伝わる文章力」を育成することに努めた。

3. 手法

子どもたちは文章を書くことにマイナスの印象を抱いているため、本実習ではポジティブ行動支援の理論を用いて文章力の育成を行った。ポジティブ行動支援には「行動のABCフレーム」と呼ばれる型がある。



まず決めなければならないのは B である。各授業でどんなことが出来るようになってほしいかを具体的に落とし込まねばならない。そして、それらの B を達成できるようになるための手立て A を考え、子どもたちのその後の学習に繋がるフィードバックとしての、達成感を掴ませるための C を考えていくことが大切になってくる。本実習では各授業において記述できてほしい内容 (B) を決定し、それが達成されるための小課題 (A) を作成し、授業後、全員の記述に対してフィードバックを行うと共に、各クラス授業毎に MVP を 1 人発表し、次授業への動機付けを行った (C)。記述力が身についたかは、3 クラスで計 5 回行った授業のうち、第 1 回目と第 5 回目で同様の課題に取り組み、その内容を①学習内容を満たしているかどうか②相手に伝わる文章であるか③両方を満たす文章であるかの 3 項目で測った。②に関しては、私を含む 3 人で測り、信頼度を担保した。

4. 結果と考察

2 点示す。1 点目は、どのクラスにおいても相手に伝わる文章力の割合は高く、学習内容を満たす文章の割合が低い結果となった。これは、記述力を測る課題を行う時間が十分確保できていなかったこと、課題難易度の高さに起因するものだ。途中の授業に関しては十分記述できていた生徒でも最終課題は書いていなかった場合が多かったので、課題設定に問題があり、生徒理解の甘さを露呈した。

2 点目は、フィードバックに注意するということだ。ある生徒が「こいつは選ばれても当然や。頭ええもん。」と呟いた。MVP は匿名発表だったが、誰が書いたか広まったケースもある。この嫉妬はイジメに繋がる可能性がある。他者を素直に認めることができる学級作りを授業実践と並行して行っていく必要がある。

本実習において記述することに対して多少なりとも子どもの肯定的反応は引き出せたように思う。課題は多くある実践となったが、ポジティブ行動支援の可能性は十分に分かったため、現場に出た際も活用していった。